

中学校保健体育ダンス授業における協働学習の実践研究

常行 泰子¹⁾、東 礼子²⁾

1) 高知大学教育学部

2) 元高知市立土佐山中学校

A Practical Research of Collaborative Learning in the Dance Classes at Junior High School Health and Physical Education

TSUNEYUKI Yasuko¹⁾, HIGASHI Reiko²⁾

1) Faculty of Education, Kochi University

2) Tosayama Junior High School

要 約

本研究では、公立中学校の保健体育授業に着目し、ダンスにおける協働学習の効果を量的・質的に検証することを目的とした。2013年11月から2014年1月、高知市立土佐山中学校全生徒を対象としたダンス授業を展開し、生徒による自己評価と総合評価及び自由記述と保健体育科教員による報告を基に検討を加えた。その結果、初回授業時よりも終了時におけるすべての項目で生徒の総合評価が高まり、技術的習得や仲間との工夫について評価の上昇する傾向がみられた。目標達成や仲間からの承認、自信や意欲に関する生徒の変容が教員評価で認識され、授業経過と共に生徒に対する教育効果の高まりを認識している状況が明らかにされた。中学校と大学が連携したダンス授業の協働学習による有効性が示唆された。

キーワード：協働学習、ダンス、外部指導者、学校体育、連携

1. 目的

2008年3月に中学校学習指導要領の改訂が告示され、中学校保健体育における武道・ダンスを含めたすべての領域が必修となった。新学習指導要領におけるダンスは、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」で構成され、イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることを楽しみや喜びを味わうことのできる運動とされる（文部科学省, 2013）。主体的・対話的な深い学びの実現に向け、2012年度からは全中学校で完全実施されている。

学校教育現場は、教員数の減少や高齢化、教員の負担増を理由に、地域スポーツ人材（外部指導者）を活用した運動部活動等推進事業を進めている。高知県においても「武道・ダンス外部指導者派遣事業」と称し、中学校保健体育科の正課授業において、教員の指導力向上等の課題解決に向けた地域の指導者を活用する試みが継続的になされている。しかしながら、学校体育における外部指導者の活用については肯定的意見だけに止まらないことから、多面的な意見集約を目的として各組織団体のヒアリング検証がなされている。

青柳ら(2015a, 2015b)は、外部指導者活用推進に向けた組織の取り組み事例を検証し、指導の在り方や安全性、金銭面についての課題を明らかにした。各学校においては、学生の外部指導者や教職課程の科目履修者、さらに教員志望学生の要望が多い点を示唆している。学校と行政、地域を含めた連携協働体制において、児童・生徒への教育的意義が改めて問われている。中村ら(2014)は、ダンスの外部コーチ活用は、東京や神奈川以外で進んでいない状況を指摘しており、地方における外部指導者の活用についての知見を明らかにすることは、今後の重要課題と考えられる。

よって本研究では、高知県における公立中学校と国立大学が連携し、教員志望学生を含めた協働学習を実践した。中学校教員と生徒、地域での指導経験を持つ大学教員と大学生によるダンス授業を展開し、生徒の教育効果を検証することは学術的・社会的意義が高いものと推察される。本研究では、中学校の保健体育授業に着目し、ダンスにおける協働学習の効果を量的・質的に検証することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象

高知市立土佐山中学校全生徒 17 名(男子 7 名、女子 10 名)、保健体育科教員 1 名(女性 1 名)

(2) 調査期間

2013 年 11 月～2014 年 1 月(10 コマ)

(3) 調査内容・方法

中学校と大学が連携してダンス授業を展開し、受講した生徒は、毎時間ごと学習ノートに自己評価と総合評価による振り返りを記録した。量的評価については、ダンス授業に関して「体をいっぱい使って仲間と楽しく踊ることができた」「いろいろな友だちと踊りで交流できた」「仲間と教えあいながら活動できた」「仲間の良い動きを見つけることができた」「仲間とアイデアを出し合って動きを工夫できた」「自分たちならではのリズム(動き)パターンで踊れた」の 6 項目について尋ね、「よくできた」(3 点)「できた」(2 点)「あまりできなかった」(1 点)の 3 段階尺度で評定させた。また、「今日の授業で体・息・心はずみましたか?」という質問文において自己の達成度を評定させた。質的評価については、「ダンスの授業を終えて 体がはずむ 息がはずむ 心がはずむダンス」レポートを用いて、ダンス授業受講前からの自由記述を授業終了時に提出させた。保健体育科教員の質的評価は、生徒の様子やクラスの状況を中心に、成果と課題に関する実績報告書を基に検証した。

(4) 授業のねらいと研究体制

ねらい：ダンス(現代的なリズムダンス)の領域学習において、仲間と関わり、意欲かつ主体的に活動できる生徒の育成

外部指導者(1 名)：ダンスの専門的指導(大学教員 30 歳代女性)

アシスタント指導者(各回につき 4～5 名)：ダンスの補助的指導(教員志望学生 10 歳代男性)

中学校保健体育科教員(1 名)、中学校特別支援学級教員(2 名)：生徒指導

(5) 授業概要

1～2 時間 ダンスウォーミングアップと基本的技能学習

3～6 時間 リズムを感じる。現代的リズムダンスのステップ学習

7～9 時間 発表会に向けた各学年の練習

10 時間 ミニ発表会開催

(6) 安全性の確保

毎時間のウォーミングアップに、ランニングとストレッチ、ゲームを用いたアイスブレイクを導入した。ダンスストレッチ、身体ほぐしの要素を組み込んだ。

(7) 楽しさと効果の要素

毎時間ごとに、ペアとグループでの作業を導入し、他者と十分に関わることができるウォーミングアップと創作過程を導入した。音楽は生徒による話し合いで決定し、POPを中心とする4曲を選定させた。振付は、既定の動きを覚えて一斉に踊る伝達指導型(犬飼, 2017)に加え、コンビネーションの一部を生徒と大学生と一緒に考えて、想像力豊かに創りあげる協働学習の形式を採用した。

3. 結果

(1) 生徒による量的評価

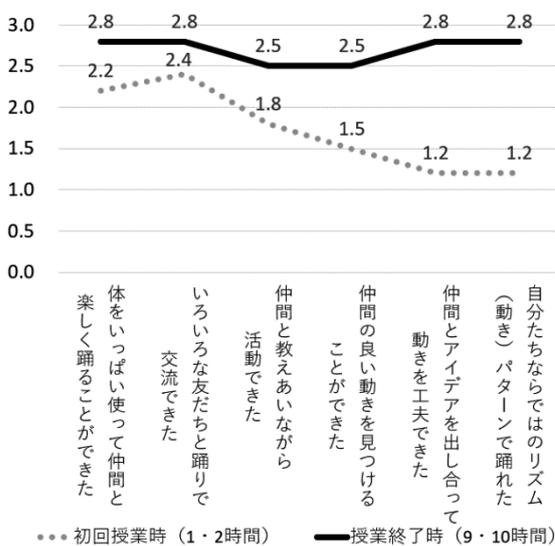


図1. 生徒による総合評価の平均値

生徒による量的評価では、1・2時間の初回授業時と比較して9・10時間の授業終了時における総合評価がすべての項目で高く示された(図1)。初回授業時は「いろいろな友達と踊りで交流できた」(2.4点)が最も高い評価であり、「体をいっぱい使って仲間と楽しく踊ることができた」(2.2点)、「仲間と教えあいながら活動できた」(1.8点)、「仲間の良い動きを見つけることができた」(1.5点)と続いた。一方で、「仲間とアイデアを出し合っ
て動きを工夫できた」、「自分たちならではのリズム(動き)パターンで踊れた」の2項目は1.2点と最も低い値が示された。

授業終了時は、「体をいっぱい使って仲間と楽しく踊ることができた」「いろいろな友だちと踊りで交流できた」「仲間とアイデア出し合っ
て動きを工夫できた」「自分たちならではのリズム(動き)パターンで踊れた」の4項目すべてが2.8点と高値であった。「仲間と教えあいながら活動できた」「仲間の良い動きを見つけることができた」の2項目は、いずれも2.5点であった。

また、「今日の授業で体・息・心はずみましたか?」という質問文に対する自己評価では、初回授業時と比較して、授業終了時においてすべての項目が高値を示した(図2)。初回授業時では、「心のはずみ」「体のはずみ」「息のはずみ」の順に高い得点を示した。授業終了時も同様に、「心のはずみ」「体のはずみ」「息のはずみ」の順に高く、初回授業時より高い値がみられ、自己評価が高まった。

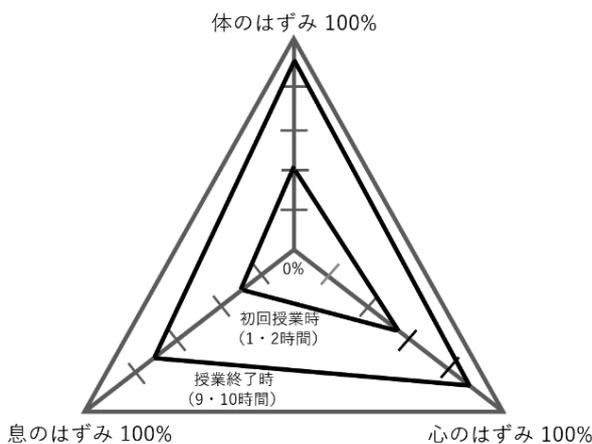


図2. 生徒による自己評価の平均値

(2) 生徒による質的評価

ダンス授業前・中・後の各段階における生徒の感想や取組み状況が、自由記述から示された。

【授業前】

- ・最初、ダンスなんてやりたくない・・・うまくできんし・・・もうとっととやめてマラソンしたいなど、とにかくやめてダンスとはおさらばしたいと思っていました。(1年生 男子)
- ・ダンスに全く興味がなく、めんどくさいなと思っていました。(2年生 女子)
- ・ダンスが嫌いです。理由は恥ずかしいからです。(3年生 男子)

【授業中】

- ・何回もやっていくたびに、すっごく楽しくなっていました・・・大学生がダンスの案を出してくれたので、とても助かりました。大学生は、とても優しかったです。(1年生 女子)
- ・先生もおもしろくて、ていねいに教えてくれて、楽しく踊ることができました。それに、高知大生も毎回来てくれて、ダンスの授業がすごくおもしろかったです。(2年生 女子)
- ・もう毎回、「早く体育の時間きてー！」と言うぐらいでした。(2年生 女子)
- ・やってみると自分がうまくなっていくのもわかるし、何よりとっても楽しかったです。(3年生 女子)

【授業後】

- ・おどりはこまかい部分とかがあって、難しかったけど、練習していく中で、おどるのが楽しくなり、ダンスが難しいとは、あんまり思わなくなりました。(1年生 女子)
- ・先生達は、ノリノリで見てくれていたのでよかった・・・このダンスを通して、人との接しかた。それに、何でもちょうせんすることなどを学んだ。(2年生 男子)
- ・笑顔は最強のまほう・・・笑顔だったら、周りの人も楽しくなるから、ダンスをする以外にも、笑顔でいたいなと思いました。(2年生 女子)
- ・思えば2ヵ月以上、ダンスを踊っていたわけですよ・・・やってみると、自分がうまくなっていくのがわかるし、何よりとっても楽しかったです・・・授業を毎週楽しみにしていました。なので、もうないのかと思うと寂しいです。(3年生 女子)

(3) 保健体育科教員による質的評価

保健体育科教員による振り返りは、以下のとおり記された。(下線は筆者)

生徒には、毎時間学習ノートに自己評価と総合評価と取り入れた振り返りをしてきた。特に生徒の総合評価をすることで、集団として仲間の良さを認め、協力して意欲的に目標を実現していくことができるようになってきた。また、個人としても仲間から自分の良さを見つけてもらうことで喜びを感じたり、自信になったりと次時への意欲も高まってきたように思う。・・・リズムに合わせて思いきり体全体を動かし、心身を開放して、仲間とともに踊り、創り、見せ合い、交流することで互いに協力し、相互理解を深めることができたように思われる。また、ミニ発表会で、参観された先生方から拍手やコメントをもらったことで「恥ずかしかったけれどとても楽しくて忘れられない思い出だった。」とほとんどの生徒が感想に書いてあった。ダンスは発表の場でこそ輝きを増すものだという事を、あらためて実感した。今後は行事での発表や地域の交流での活動と、ダンスの発表の場を多く設定できるように取り組んでいきたい。

4. 考察及び今後の課題

本研究は、中学校の保健体育授業に着目し、協働学習の効果を量的・質的に検証することを目的として、中学校と大学が連携してダンス授業を展開した。

初回授業時（1・2時間）と比較して、授業終了時（9・10時間）はすべての項目において生徒の総合評価が高まり、特に技術的習得や仲間との工夫に関する評価が顕著に高まった。高橋ら（2003）の形成的授業評価では、技術的達成を意味する「成果」や工夫に関する学習規律の「学び方」の因子は授業評価を構成する項目とされており、本結果においても類似する教育効果が量的に検証されたことがわかる。「いろいろな友だちと踊りで交流できた」「体をいっぱい使って仲間と楽しく踊ることができた」のような個別運動と比較して「仲間とアイデアを出し合って動きを工夫できた」「自分たちならではのリズム（動き）パターンで踊れた」の項目は他者との関わりや相互作用による影響が大きく、高度かつ複雑な創作段階に至るダンス授業の最終過程において協働学習の有用性が明示されたと考えられる。体・息・心のはずみに関する自己評価では、初回授業時と比較して授業終了時の平均値が高くなり、心身の側面から自己の達成度を感じた生徒が多かった。総合評価・自己評価ともすべての平均値は高まり、【授業前】【授業中】【授業後】それぞれの段階における自由記述の分析から生徒における肯定的な変容が示されている。江藤（2017）の中学校創作ダンス授業の記述分析では、肯定的記述だけでなく「緊張してしまって動きがぎこちなかったので悔しかったです」「同じ動きしかしていなくて少しつまらなかった」などの否定的記述もみられる。しかし本研究では、生徒と年齢が近い大学生や比較的若手の教員が介入したこと、生徒自らが選曲するなど“楽しさ”を構成する要素が授業に盛り込まれていたことなどから、否定的記述がほとんど示されなかったものと推察される。

また、教員による評価は、目標達成や仲間からの承認、自信や意欲に関する生徒の変容が記述されており、授業経過と共に教育効果の高まりを認識している状況が明らかにされた。大津ら（2016）は、単元を通して生徒と一緒に動き続けることや寄り添った言葉かけ等が、高い授業評価を受ける要因であると述べている。思い切り体を動かすことや、互いに協力することが相互理解を深めたと本研究の保健体育科教員は指摘し、ダンスが持つリズム性やペア・グループでの共同作業による教育効果が改めて確認された。外部指導員を導入したダンス授業は、導入していない授業よりも楽しさを感じられる可能性が示唆されており（望月, 2017）、年齢が近い大学生による承認や励ましは、体育授業や部活動に対する楽しさを構成する要素として極めて有効性が高いものと考えられる。ミニ発表会では、中学校における多数の教員が鑑賞し、行事での発表会や地域での交流活動など、生徒の意欲的なプレゼンテーションにつながる授業のアイデアも指摘された。今回、保健体育科教員と特別支援学級教員は、生徒指導の役割として主に位置付けられている。酒向ら（2015）が指摘するように、教師が個々の授業の成否に一喜一憂せず、見通しを持って生徒の変容を辛抱強く待つことは、生徒の変容を観察するために必要な要素であったと推察される。

本研究では、高知県の小規模公立中学校生徒・教員を調査対象としており一般化はできない。「できること（achieving）」を達成するためには、授業中の言葉かけや精緻な単元計画・授業計画が重要とされ（大津ら, 2016）、教員志望者や運動指導者を目指す人材育成の重要性が改めて問われることになった。教職課程に在籍する大学生の時間的制約を考慮すれば、ICT等を利用した協働学習の可能性も今後の検討課題と考えられる。

謝辞

本研究にご協力を賜りました高知市立土佐山中学校と高知県教育委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

江藤真生子（2017）中学校創作ダンス授業における生徒の学びに関する一考察. Research Journal

of JAPEW, 33, 43-53.

中村なおみ・内田匡輔・宮本乙女・中村恭子・布施典子・坂上香苗（2014）中学・高等学校におけるダンス教育推進に向けての調査及び取り組みについての研究：授業とクラブ活動へのアプローチ．SSF スポーツ政策研究，3(1)，230-239.

文部科学省（2013）武道・ダンス必修化

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1330882.htm（2018年11月9日閲覧）.

高知県教育委員会保健体育科（2018）平成30年度中学校保健体育（武道・ダンス）授業協力者派遣事業 <http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310501/taiiku.html>（2018年11月9日閲覧）.

青柳健隆・石井香織・柴田愛・荒井弘和・深町花子・岡浩一郎（2015a）運動部活動での外部指導者活用推進に向けた組織の取組事例．体育学研究，60，267-282.

青柳健隆・石井香織・柴田愛・荒井弘和・深町花子・岡浩一郎（2015b）運動部活動での外部指導者活用推進に向けた組織的実践の長所と問題点：異なる実践モデルに対する教員の評価．体育学研究，60，783-792.

高橋健夫（2003）体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント－．明和出版，東京.

大津展子・高田晶子・吉野聡・内田雄三（2016）中学校選択制ダンス授業における一考察－生徒の授業評価と感想を中心として－．白鷗大学教育学部論集，10(1)，177-189.

望月拓実（2017）中学校現代的なリズムのダンス授業における外部指導員導入の有効性．国際武道大学紀要，33，67-81.

酒向治子・出原智波・平田麻里子・猪崎弥生（2015）教師と教師教育者の協働による男女共習「現代的なリズムのダンス」授業づくりの試み．岡山大学大学院教育学研究科研究集録，158，169-181.

犬飼己紀子・田玉雅美・橋爪みつる（2017）保健体育科教員養成課程における「ダンス」授業と学生の変容－体験型学習法による授業記録から－．教育総合研究，1，169-179.